

「スイカズラ」

廣瀬清一 事務局



五月の晴れた早朝。光に満ちた朝は、心まで優しくしてくれる気がする。気づけば木々の緑はいつの間にか力強さを取り戻し、陽光を受けて生き生きと揺れている。

きらめく陽ざしに、気持ちまで洗われるようだ。柔らかな甘さを含んだ清々しい風が通り抜けていき、なんとも心地よい。その香りの主は、塀際に植えられたかわいらしい花をつけたスイカズラだ。

二輪が寄り添って咲く姿は、まるで仲の良い恋人同士のようにほほえましい。枝先では花が穂のように集まり、家族のように寄り添って咲いている。

細い筒の先でふわりと開いた花は、上の花卉が四つの羽のように軽やかに反り返り、下の一枚はそっと受け皿のように残る。その奥の細い筒には、甘い小さな宝物がひっそりとしまわれているかのようだ。

そばを通るだけでふんわりと甘い香りが漂う。スイカズラの香りは昼よりも夜の方が強く、白い花からはジャスミンのような清潔感のある香りに、わずかにレモンのような柑橘の気配が混じる。

スイカズラは蔓性植物で、朝鮮半島や中国など東アジアに広く分布する。学名は *Lonicera japonica*。原産国は日本で、野山に自生するほか庭木としても親しまれている。

花筒の内側に蜜腺があり、吸うとさりとした甘さがあることから「吸い葛(スイカズラ)」と呼ばれる。幼い頃に蜜を吸った経験のある方も多だろう。また、スイカズラにはいくつかの別名がある。冬でも葉を落とさず寒さに耐えることから「忍冬(ニンドウ)」、つぼみは淡いピンクを帯びた白で、開花すると白から黄色へと変化することから「金銀花(キンギンカ)」とも呼ばれる。フランス名は Chevrefeuille(シェーブルフイユ)で、この名を冠したフレグランスも多い。

古くから薬効が知られ、花を乾燥させたものは「金銀花」、葉や蔓を乾燥させたものは「忍冬」と称されてきた。「金銀花茶」や「忍冬酒」も広く親しまれている。

忍冬文(ニンドウモン)は、スイカズラのような蔓草を図案化した唐草模様の一つである。

起源はギリシアにあり、中国南北朝を経て日本の飛鳥時代に伝わった。生命力・長寿・繁栄の象徴とされ、法隆寺金銅灌頂幡の最上部の透かし彫りにも、雲や仏菩薩、飛天とともに用いられている。



忍冬文『法隆寺金銅灌頂幡』*2,3

忍冬文の美は、単なる装飾ではない。

蔓が描く曲線には、自然がひそやかに刻んだリズムが息づいている。

その線は、風に揺れる草のようにさりげなく、水面に広がる波紋のように穏やかで、見る者の心に知らぬ間に寄り添う。

その曲線が自然界の「ゆらぎ」と同じ呼吸を持つからこそ、人は本能でそれを感じ取り、安らぎや安心感を覚えるのだろう。

その美は、「流れ」そのものの優雅さに宿る。

ひと時、この流れに心を委ねてみてはどうだろう。

そこには、言葉よりも確かな、自然のまなざしがある。

参考文献

- 1) 麓次郎 「スイカズラ」 季節の花辞典 八坂書房 1999
- 2) 「金銅灌頂幡」 e 国宝 <https://emuseum.nich.go.jp/detail>
- 3) 「忍冬文」 精選版 日本国語大辞典 <https://kotobank.jp/word/>